JSCE NEWS CAST AUG. 1992 No. 30
日本がん疫学研究会

日本がん疫学研究会の代表幹事に就任して

愛知県がんセンター研究所　富永祐民

この度、日本がん疫学研究会の会員の皆様のご推挙により代表幹事に就任致しました。あいにく去る６月に大阪で開催された日本がん疫学研究会の幹事会並びに第１５回学術総会は同じ日に東京で開催された厚生省と文部省関係の会議のために出席できませんでしたので、異例ではありますが、ＮＥＷＳＣＡＳＴの誌上で代表幹事就任のご挨拶をさせていただきます。

日本がん疫学研究会の第１回研究会は１９７７年に名古屋で開催され、埼玉で開催された第４回学術総会の際に会則が作られ、幹事会を置くこと、ニュースレターを発刊すること、年会費を徴収することなどが決まりました。初代の代表幹事には幹事会での互選により平山雄先生に就任していただき、青木國雄先生にはニュースレター（ＮＥＷＳＣＡＳＴ）の編集をお願いしました。その後日本がん疫学研究会は順調に発展し、がん疫学者を活気づけ、ひいては日本のがん疫学の発展に貢献してきました。平山先生は満６０歳を迎えられた際、日本がん疫学研究会の若さと活性を保つために、自ら範を示して代表幹事を勇退され特別会員になられました。これを機会に幹事も満６０際で勇退することになりました。日本がん疫学研究会の役員の「定年」は会則では定められておらず、幹事会での申し合わせになっています。この申し合わせはその後も守られ、２代目の青木代表幹事、３代目の広畑代表幹事も満６０歳で勇退されました。他の多くの幹事、監事の先生方も満６０歳で勇退され、特別会員になられています。このことは裏を返せば、「若いがん疫学研究者がしっかりしなければいけない」ということになります。幸い日本がん疫学研究会の会員には若い研究者が多く、活気があります。研究発表に対して活発な討論が行われることもぜひ継続させたいと思います。会員数が多くなることは良いことですが、一方では発表数が多くなり、その結果、討論時間が短くなり、学会的雰囲気に変わってしまい、研究会の良さが失われてしまいます。このことに対しては歴代の会長が苦心され、ポスターセッションと口演を併用することやシンポジュウムの企画などによって両立されています。

日本がん疫学研究会は発足の当初、経済的理由などにより、当面機関誌を発刊せず、年１回の学術総会の記録と年に３－４号のニュースレターを発刊することにしました。学術総会の記録集の作成には篠原出版に全面的に協力していただき、「癌の臨床」の別集または特集号のかたちで発刊されています。この記録集はそれなりに役立っていますが、ちゃんとした原著論文は英文の専門雑誌に投稿するようにし、日本語の記録集で終らないようにしたいものです。日本がん疫学研究会のニュースレター（ＮＥＷＳＣＡＳＴ）も会員相互間のコミュニケーションやがん疫学に関する情報交換に役立っています。

さて、日本疫学会の誕生にともない、ここ２、３年来、日本がん疫学研究会を存続させるか、発展的解消により日本疫学会に合流するかで討議が続いています。このようなむずかしい時期に日本がん疫学研究会の代表幹事に就任するのは大変なことですが、会員の皆様のご指導とご協力を仰いで、なんとかこの難局を切り抜けたいと思っています。がんの疫学のことのみを考えれば、日本がん疫学研究会を存続させ、ますます発展させればよいのですが、がんの疫学から一歩前進して、がんの予防に関する研究、ひいてはがんの予防対策（特に１次予防対策）を全国的に普及しようとすれば、どうしても循環器疾患の疫学グループや健康増進グループなどと共同歩調をとるか、最低限意見交換や研究や対策面での調整を行う必要があります。一方、重要であるにもかかわらず少数派の疫学者の市民権獲得のためには、各分野の疫学者が大同団結して疫学会を発展させ、日本医学会の分科会として認知され、国際疫学会の日本の窓口になる必要もあります。日本疫学会はやっと発足して活動を開始しかけたところであり、がんの疫学者は当分、日本がん疫学研究会を基地として研究活動を続けながら、日本疫学会の発展にも貢献していただきたいと思います。

元若手（？）の小生もいつの間にやら５０代の半ばになり、あと何年活躍できるかと考えるような年になってしまいました。皆様方のご指導、ご鞭撻により日本がん疫学研究会、ひいてはがん疫学の一層の発展に貢献したいと思っています。

第１５回日本がん疫学研究会を終えて

1992年６月12日第１５回日本がん疫学研究会がコミュニティプラザ大阪で開催された。今回の主題には「がん予防の実践とその疫学的評価」をとりあげた。この主題に関しては、がんの１次予防・２次予防の別、研究・対策の別、完了した研究・進行中の研究・計画の別なく多くの演題が寄せられたので、これを３つのミニシンポに編成して、発表と討議がおこなわれた。この３つのミニシンポの合計12題の発表の他に、一般演題が合計17題発表され、１０３人の参加（有料入場者）のもとに、朝９時15分から夕方６時15分まで熱心な討議が行われた。以下、私見を交えながら研究会の報告をおこなうこととする。

ミニシンポⅠ「がん検診の評価」では、東北大学の久道先生の司会で５題の発表があった。この中で特に神経芽腫マススクリーニングの評価を扱った２題の発表で、overdiagnosisに関する具体的なデータが示されたため、熱心な討議がおこなわれたが、早期発見・早期治療がそのままがん死亡の減少につながるとは限らないことが改めて確認されたように思う。また、今後のがん検診の導入にあたっては、札幌医大の西先生のグループのように、最初の企画段階から参加し、疫学的評価にたえるデザインの設計、データの収集・解析をおこなうべきことも改めて確認された。

ミニシンポⅡ「肝がん対策」では、大阪府立成人病センターの日山先生の司会で４題の発表がおこなわれた。特にお招きして講演をお願いした広島大学の吉澤先生の「肝がん対策としての肝炎ウイルス対策」は、豊富なデータを駆使しての発表で、具体的な肝炎ウイルス対策にコミットした研究者ならではの迫力があった。わが国は世界有数の肝がん多発国であり、わが国の肝がん対策は世界のモデルとなる。単に疫学調査にとどまらず対策そのものの企画・立案・モニタリング・評価の分野への疫学研究者の積極的な参加が期待されている。

ミニシンポⅢ「禁煙・防煙」では、愛知県がんセンター小川先生の司会のもとで３題の発表があり、具体的な禁煙指導プログラムや喫煙防止教育プログラムが示された。わが国の喫煙対策は欧米に比べて立遅れていたが、ようやく禁煙指導、喫煙防止教育の具体的なプログラムの開発とその有効性の評価のデザインの企画の段階にまで到達した。この分野に若き疫学研究者が多数積極的に参入して、お互いに切磋琢磨しプログラムの改良、評価と普及がおこなわれるようになることを期待する。来年５月31日の世界禁煙デーのテーマは「たばことたたかう保健医療組織・従事者（Health services, including health personnel, against tobacco）」である。がん疫学にかかわるすべてのものが何らの形でわが国の喫煙対策の推進の役割を果すことが今こそ望まれている。

ところで、研究会の前日には日本衛生学会ワークショップ「分子遺伝疫学ー実験医学的基礎とがん予防への展望」が大阪大学の森本先生のお世話で阪大医学部にて開催された。遺伝子レベルでの発がんメカニズムの解明は、目もくらむ程の勢いで進歩している。がんの疫学研究者は、このような学問の進歩をがん予防の実践にむすびつけるような研究をおこなうことも求められている。今回の研究会では演題発表はなかったが、がんの化学予防は今後の重要なテーマとなるはずのものと考える。仮説の設定、技術の開発、有効性の評価、実地検証そして普及の手順を順次踏んで、化学予防をがん対策にとりあげるためには、がん疫学研究者が企画段階から積極的に参加することが必須と考える。医療の場におけるハイリスクグループに対するβカロチンや食物繊維などによる化学予防の研究についてはわが国でも早急に取組む必要があろう。

今回の研究会には主題と直接関係のない一般演題も数多く寄せられたため、プログラムはやや窮屈なものとならざるをえず、タイトなスケジュールのため、討議の時間が余りとれなかったのは残念であった。来年の研究会からは、主題に沿って演題をえらぶこととなったので、十分な討議ができるようになるものと期待している。

なお、本研究会の会議記録は「癌の臨床」臨時増刊号として出版するべく準備を進めている。ただし、今回の多くの発表のうち主題に沿ったものに限って執筆依頼することとした。この場を借りておことわりする。

（大阪がん予防検診センター　大島　明）

ネガティブデータとポジティブデータ

前々号のＮＥＷＳＣＡＳＴに「がん疫学に対する風と目」というタイトルで生化学者の山村雄一先生と杉村隆先生のがん疫学に対する意見を紹介させていただいた。引き続き、前号のＮＥＷＳＣＡＳＴに「病理学者がみたがん疫学」というタイトルで３人の病理学者に登場していただいた。今回はいよいよ何人かの疫学者に登場していただく。疫学者の場合、大部分の人は現役であり、いろいろ差し障りがあるので、名前を伏せようかと思ったが、かえって思わせぶりなので、実名で登場していただくことにした。今回のタイトルは「ネガティブデータとポジティブデータ」である。

★

ネガティブデータはある仮説を立てて研究を行ったとき、その仮説を支持する結果が得られなかった場合か、何かおもしろい結果を見つけ出そうとしてデータを解析しても、報告に値するようなおもしろい結果が見つからなかった場合を指す。中には定説を支持しないばかりか、逆の結果（方法論にも問題はなく、統計学的にも有意の結果）が得られることもある。このような場合はネガティブデータというよりは「逆ポジティブデータ」または「超ネガティブデータ」といった方がよいかも知れない。さて、ここで問題にしたいのはこのような一連のネガティブデータが得られたときの疫学者の対応である。

★

最初に登場していただくのは愛知県がんセンター研究所疫学部の加藤育子先生である。小生は疫学部に所属していたので、これまでに加藤先生といくつかの共同研究を行ってきた。大ざっぱにいって、その内の半分くらいは予想した通りの結果が得られた。このようなときは特に議論もなく、論文投稿まで半ば機械的に進む。論文を雑誌に投稿してもアクセプトされる確率も高い。心は穏やかであるが、正直にいってあまりおもしろくない。何故なら、期待通りの結果が得られたということは多少新しい点があっても定説を追試したに過ぎないからである。しかし、残りの半分くらいはおもしろい結果が得られないばかりか、何が何だか訳がわからず、頭が痛くなるような結果が得られたり、定説に反するような結果が得られた。このような場合、加藤先生はうつむき加減に、がっかりした様子で、おもしろい結果が得られませんでしたと云って、申し訳なさそうに小生にデータを示すことが多かった。このようなとき、小生は半分励ます気持ちで、半分本心で、「かえっておもしろいじゃないか」と云った。一見訳がわからない、または定説と逆のように見える結果でも、よく考えてみると理解できることもある（例えば、前号で紹介した胆道がんのケース・コントロール研究の結果など）。しかし、このようなデータを論文にまとめるのも大変であるし（特に、考察）、雑誌に投稿しても簡単にはアクセプトされない。難産でも生まれればよいが、流産してしまうこともある。もちろん、方法論に問題があったり、症例数が少なくてはっきりものがいえない場合は仕方がないが、あきらめきれないこともある。

★

１－２年前の厚生省がん研究助成金広畑班の班会議で、大腸腺腫と大腸がんのケース・コントロール研究の結果を発表した。詳しいことは忘れてしまったが、きれいな期待通りの結果が得られていなかった。すると、防衛医大の古野純典先生は「そのような結果は不愉快です」とコメントされた。その気持ちはわからないでもないが、期待通りの結果を気持ちよく聞いたところであまり進歩がないような気もする。一般論であるが、古野先生をはじめ、徳留先生、広畑先生など、九大医学部公衆衛生の先生方は倉恒先生のご指導の結果か、雲をつかむような研究をせず、一定の仮説を立てて（ねらい打ちをして）、着実な研究をしておられるようである。敬服に値す得る。同様に大阪成人病センターグループの先生方も地味ながら、着実に点を稼いでおられるようである。

★

ポジティブ得点の稼ぎ頭はなんといっても平山先生であろう。平山先生は計画調査という膨大なデータベースを持っておられ、これをいろいろな角度から分析して、次々にポジティブデータを発表しておられる。平山先生がネガティブデータないし古野先生が言われる「不愉快な結果」を発表されたことはあまり記憶にない。小生の推測では平山先生は宝が埋もれている場所を鋭い仮説で的確に嗅ぎあてながらも、宝石かきれいな石程度のものを世に出し、ゴミや汚い石は捨てておられるのではないかと思う。これは平山先生に限ったことではなく、大部分の研究者にも当てはまるのではないかと思う。

★

杉田稔先生は最近ネガティブデータが発表されにくいことによるパブリケーションバイアスの研究をしておられ、ネガティブデータの発表の重要性を指摘しておられる。環境汚染や食品添加物の健康影響についてはネガティブデータの価値は高い。薬物の効果を判定するための臨床試験においてもネガティブデータはそれなりに重要である。もちろん、症例数の不足や治療群間の偏りによるネガティブデータは問題にならないが、きちんと行われた臨床試験でネガティブデータが得れれたときは公表するべきである。

★

小生自身の研究についてふり返ると、いくつかのネガティブデータを経験している。最初の重大なネガティブデータは小生の大学院時代の学位論文である。テーマは「脳卒中の成因における脂質代謝異常の役割り」で、結論はわが国の脳卒中患者の血清コレステロール値やトリグリセライド値は正常人の値と差がない、つまり、わが国の脳卒中の成因には高脂血症は関与していないというものであった。その後、この研究は小町喜男先生のグループの先生方によってさらにすすめられ、脳出血においては低血清コレステロール値はむしろ危険因子であることがわかり、現在では定説化している。大学院修了後アメリカへ留学し、数千名の心筋梗塞患者を対象としたコレステロール低下剤の延命効果を判定するための大規模な臨床試験に従事した。二重盲検法によるランドマイズド・トライアルの結果、ほとんどのコレステロール低下剤はコレステロール低下作用は認められても延命効果は認められないか、逆にプラセボ対照群より有意に悪いという結果が得られた。これも重大なネガティブデータであった。帰国後、環境庁で大気汚染と呼吸器疾患についての疫学調査の結果の解析に関与した。確かに大気汚染と呼吸器症状の間に因果関係は認められたが、喫煙の呼吸器疾患・呼吸機能に対する影響の方がもっとはっきりしていた。これも一種のネガティブデータといえよう。昭和５２年に愛知県がんセンター研究所の疫学部へ移り最初に取り組んだのが胆道がんの疫学的研究であった。日本人の胆道がん死亡率が国際的にみて極めて高率であることは意外な新しい事実であった。教科書に書いてある通り、胆石は明らかに胆道がんの危険因子であることは確認されたが（定説の追試）、ケース・コントロール研究の結果、動物性脂肪に富む食品は危険因子どころか、逆に防御因子である可能性すらあることがわかった。これも動物性脂肪の摂取量の多い欧米諸国の胆道がん死亡率が高くないことと矛盾しない。このように、小生は大学を卒業してから今日に至るまで、個人的にいくつかの重要なネガティブデータに遭遇しているので、ネガティブデータに異常に関心が高く、平均から偏った考え方をしているのかも知れない。日本がん疫学研究会の会員諸兄のご意見もおききしたいものである。

（愛知県がんセンター研究所・富永祐民）

第15回日本がん疫学研究会幹事会議事録要旨

日　時：1992年6月11日（金）　6:00-8:30p.m.
場　所：大阪大学医学部（大阪）
出席者：幹　　事：大島、三宅、久道、柳川、笹波、村田、稲葉、中村、渡辺（昌）、山口、蓑輪、恒松、小川、田島、日山、森本、馬淵、廣畑、徳留
監　　事：清水、花井
特別会員：渡辺（宏）、平山、藤本、加美山、井上

1. 庶務報告

田島庶務担当幹事から、1992年6月1日現在の会員数は、274名（幹事数は29名）と報告された（資料1参照）。また、第14回日本がん疫学研究会（東京）の記録集は篠原出版から癌の臨床37巻（1992年）2月臨時増刊号、特集「癌の先行疾患」（¥4,326）として発刊されたので、バックナンバーの雑誌（資料2参照）と同様に会員諸子に購読を期待したい旨の報告があった。

2. ニュースレターの発刊

小川幹事から、昨年度もニュースレターを4号発刊、今年から新企画としてベテラン疫学研究者と新人研究者を組み合わせたＶＦ通信を取り入れた。今年度の秋まで小川幹事と清水監事が編集に当たるが、以後は徳留幹事、田島幹事に編集を依頼する旨報告があり、承認された。

3. 会計報告

田島庶務担当幹事から、平成3年度の会計収支報告、花井監事から監査報告があり、承認された。平成4年度の予算案については、研究会総会開催の補助金増額（25万から30万に）が承認され、さらに予定残額476,595円のうち20万円はワークショップなどを開催するための予備費として計上することになった。

4. 役員等の一部改選

廣畑代表幹事から、本研究会の定年制度に基づき廣畑代表幹事と川井幹事を特別会員に推薦、新代表幹事としては発足当時から本研究会の発展に貢献してきた富永幹事を推薦したい旨、報告があった。また、新幹事として渡辺浹氏（京都府立医大）を推薦し、その他の任期の切れる他の幹事と監事は全員任期を更新したい旨、報告があった。以上すべて承認された。

5. 次年度の研究会の開催

廣畑代表幹事から、第16回日本がん疫学研究会の会長には中村幹事（昭和大学）にお願いしたい旨報告があり、承認された。中村幹事から来年度研究会の会期は平成5年6月下旬～7月上旬を予定しており、主題は「がん疫学情報の収集と活用」（仮題）と報告された。

6. 日本がん疫学研究会と日本疫学会の関係について

廣畑代表幹事から、本題に関する臨時幹事会の討議内容の要約はニュースレター28号に掲載されているが、要は日本疫学会とは性格を異にする学会形式を取らない研究会（日本がん疫学研究会が発足したときの原点）をしばらく存続し、学術集会やワークショップを開催しながら、がんの疫学研究の発展と会員相互の親睦をはかっていきたい旨報告があり、承認された。但し、会則の内容は変更することなく、定期的に開催する学術集会は従来通り会長がその任に当たり、その他の行事は世話人が担当することになった。

第３回日本疫学会総会のご案内

会長　柳川　洋
（自治医科大学公衆衛生学教授）

１．日時　平成５年１月２１日（木）、２２日（金）

２．場所　栃木県総合文化センター
〒320　宇都宮市本町１－８
交通　ＪＲ宇都宮駅よりバス10分（県庁前下車）

３．プログラム
特別講演(1)　西太平洋地域における心血管疾患の動向
－　予防への教訓　－
Robert Beaglehole
（オークランド大学地域保健学教授）
特別講演(2)　食とがん
－　日米の比較疫学からの教訓　－
Milton Z. Nichaman
（テキサス大学栄養疫学教授）

要望課題　疾病登録、パソコンの応用、難病、プライマリーケアと疫学、感染症、運動、老化、疫学方法論など

その他、シンポジウム、教育講演など

４．資料請求先　〒329-04　栃木県河内郡南河内町薬師寺
自治医科大学公衆衛生学教室内
第３回日本疫学会事務局
担当　坂田清美、阿相栄子
電話　0285-44-2111（内線 3106）
FAX　0285-44-7217（直通）

発行
日本がん疫学研究会
事務局　〒464　名古屋市千種区鹿子殿１－１　ＴＥＬ　052－762－6111
愛知県がんセンター疫学部　気付　振替口座　名古屋1－37001
編集責任者
清水弘之
小川　浩